

SONRISA

そんりさ

Vol.131



グアテマラ「希望」協会の組織強化ファシリテーター
チャニス・ウフバンさん

「そんりさ」はスペイン語で「微笑み」を意味します。私たちレコムは様々な活動を通じてラテンアメリカ・カリブの人々と喜びを分かち、共に生きていきたい、彼らの微笑みを私たちの微笑みにしたいと考えています。

エクアドル・アマゾンの石油開発

- | | | |
|----|---------------------|--------------|
| 2 | エクアドル・アマゾンの石油開発 | : 長田 顕泰 |
| 6 | ペルー・鶉とともに暮らす | : 古谷 桂信 |
| 9 | グアテマラ・デレゲーション報告 | : 石川智子・新川志保子 |
| 14 | 民芸品生産者訪問 | : 佐々木玲子 |
| 17 | ラ米百景「大人になりきれないMVLL」 | : 伊高浩昭 |
| 19 | 音楽三味♪ペルーな日々 | : 水口良樹 |
| 21 | メキシコ食巡り | : ミゲル・アクーニャ |
| 22 | ニュースクリップ | |

エクアドル・アマゾンのキチュア社会に おける石油開発の影響

長田 顕泰

赤道直下に位置する国、エクアドル。この国は、標高五〇〇〇級のアンデス山脈が連なるシエラ地方 (Sierra)、美しいビーチの広がる太平洋岸のコスタ地方 (Costa)、広大なアマゾンの熱帯雨林が見られるオリエンテ地方 (Oriente)、進化論で有名なガラパゴス諸島 (Galápagos) の大きく四地方に分けられます。日本の面積の四分の三ほどの小さな国にもかかわらず、地理的な多様性に非常に富んだ国です。その中に、一三の先住民が住んでおり、文化も多種多様です。

本稿は、そんなエクアドル・オリエンテ地方における石油開発地域での現地調査を基に、石油開発に対する先住民キチュアの人びとの声を紹介させていただきます。

エクアドル・アマゾン（オリエンテ地方）とキチュア

エクアドル先住民の中で「キチュア (Kichwa)」は八六%を占め、シエラ地方とオリエンテ地方の広範囲に分布しています。今回現地調査を行ったオリエンテ地方にもキチュアの人びとが多く住んでいます。

歴史的にオリエンテ地方をみると、一六世紀頃、侵略してきたスペイン人によって敷か

れたエンコミエンダ制の下に統治されてきました。その後、一七世紀から一八世紀の間、多くの先住民が住むこの地域では、それぞれ同民族内で話されていたそれぞれの民族の言葉とは別に、異なる民族間の共通語としてキチュア語が用いられていました。一八世紀終わりになると、個々の独自の言語が衰退し、共通キチュア語を背景にした新たなアイデンティティが生まみ出されていきました。現在キチュアと呼ばれる人々は、元をたどると、複数の民族から生ま



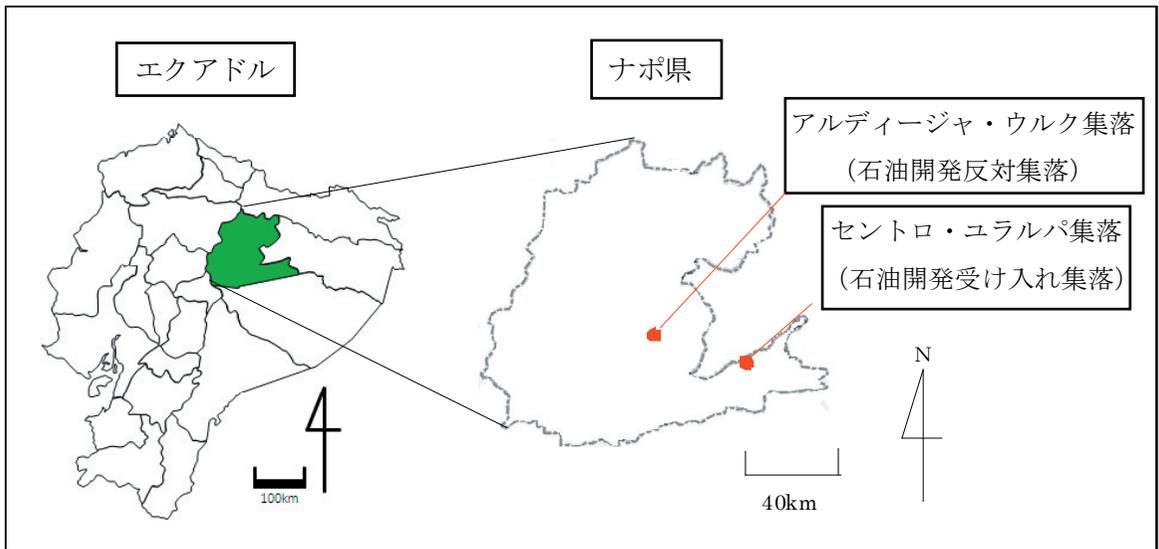
写真1 エクアドル・アマゾンで進む石油開発と石油パイプライン (筆者撮影、2009年5月25日)

れた民族ということができません。そのため、同じキチュアでも地域によってやや異なる伝統を持っており、陶器の文様や言語の文法・語彙にも大きな違いを持っていました。ただ、昨今では、インフラ向上によって地域間の移動が容易になったことや地域間の婚姻が一般的になったことにより、キチュア内の違いはなくなりつつあるようです。

このオリエンテ地方における石油開発の始まりは一九二〇年頃です。一九三〇年代になると、様々な多国籍企業がこの地方で石油開発に従事するようになったものの、成果は上がりませんでした。この頃にはプロテスタント宣教師団やゴム、バルサ材、金を求める会社などの介入も見られました。一九六〇年代になると、世界の石油需要の拡大に伴い、再びエクアドル・アマゾンの石油資源が注目され始め、一九七〇年代にエクアドル・アマゾンにおける本格的な石油開発が始まりました (写真1)。エクアドル・アマゾンの石油開発は、一九七〇年代から現在に至るまで約四〇年の歴史を持っているとされています。そうした中、アメリカ石油会社テキサコ社と住民との対立も生じ、現在に至っています。以下、先住民キチュアの持つ石油開発に対する認識の実態について書いていきます。

石油開発反対集落とその経緯

標高約二八〇〇級の首都キトに到着し、バスで六時間ほどアンデス山脈を下ると、キトの乾燥した冷たい空気がから一転、熱帯雨林特有の



ムツとした湿気の多い空気が肌を包み込みます。「アマゾンに来た」と実感する瞬間です。今回はそんなオリエンテ地方に位置する二集落を調査してきました。その一つが石油鉱区20内に位置するアルディージャ・ウルク集落² (Ardilla Urku II 以下 A 集落) で、ここでは今現在でも石油開発に対する反対運動が行われています。まず、A 集落における主な出来事を見てみます。

一九六五年、現在の A 集落を含む一七集落で「ルクジャクタ・サンペドロ農牧畜生産組合有限会社」³ が結成されました。二〇〇七年に「ルクジャクタ・キチュア集落共同体 (PKR)」に改名されましたが、この組織が石油開発反対運動の社会的基盤となりました。その後、二〇〇八年、エクアドル政府とカナダのアイバン・ホーエネルギー会社との契約が成立しました。この契約により、PKR 領域を含む鉱区20における三〇年間の石油探査、掘削の権利が認められました。しかし、これに反対した A 集落住民を含む PKR の人たちは、ルクジャクタ宣言を発表しました。その宣言の中で「政府はアイバン・ホーエネルギー会社等の多国籍企業を即座に撤退させるべきである」と宣言しており、二〇一一年現在、PKR 領域内での石油開発は始められていません。

この政府の石油開発契約の過程で、エクアドル共和国憲法⁴ と住民の意見の齟齬が起りました (写真2)。憲法では「環境に害を与えうる国家による全ての決定は、住民の意見が考慮



写真2 石油開発決議を行う PKR 住民
(筆者撮影、2010年6月18日)

に入れられなければならない。しかるべく情報提供がなされ、住民の参加が法の下に保障され (88条) います。また、「非再生可能資源の探査・採掘計画に関し、その土地を持つ住民は政府と協議する権利がある」 (84条) としています。すなわち、適切な情報提供と協議に関し、住民の権利が認められているのです。

しかし、二〇〇三年に初めて実施された A 集落での住民との事前協議は不十分なものでした。協議への参加人数割合の少なさや協議期間の短さといった問題点が指摘されています。それに加え、石油開発の及ぼしうる危険が過小評価され、かつ便益が拡大解釈された情報が住民に提供されていました。

そのため、二〇〇四年、A 集落を含む PKR は総会を開きました。そこで、石油開発の介

入に対し反対の意思表示をすることを決定し、二〇〇七年のルクジャクタ宣言にて石油開発反対を表明したのです。

石油開発に対する住民の危惧

続いて、A集落の事例を基に、石油開発に対し、キチュアの人びとが抱いている危惧について見ていきたいと思います。

二〇一〇年、石油開発を受け入れていないA集落住民への聞き取り調査を行い、彼らの石油開発に対する危惧を抽出しました。各世帯の世帯主、もしくは配偶者に対し「石油開発になぜ反対しているか。石油開発を受け入れるかどうかと考えるか」という質問を自由回答で行いました。住民からは次のような意見を聞くことができました。

■「川が汚染されて川魚が減ってきてから、石油会社は受け入れていないんだ。」(25歳キチュア男性)【川魚の減少】

◆「森が破壊されて動物もいなくなってしまう」(23歳キチュア男性)【動物の減少】

◆「大地が駄目になってしまふ。動物や魚を保全するために石油開発に反対しているんだ」(45歳キチュア男性)【動物の減少】

●「川が汚染されるし、病気になる人も増えるだろう」(40歳キチュア男性)【健康被害】

●「環境を守りたいからだ。石油を作るときに有毒な煙とかで癌とか健康にも被害があるしね。」(43歳キチュア男性)【健康被害】



写真3 川遊びをするC集落の子ども
(筆者撮影、2010年11月23日)

A集落周辺にはホジン川とその支流の小川が流れ、住民は主に漁労、洗濯や水浴び、トイレに利用しています(写真3)。また、滝や川を利用した住民主導のコミュニティー・ツーリズムを行っている事例があります。そのため、石油開発が川に与える影響を多くの住民が危惧していました。また、狩猟を行う世帯が半分以上(64%)を占め、動物への影響を危惧する声もありました。さらに、住民の主な疾病は風邪、下痢ですが、それ以外の癌などの深刻な病気の発生を心配する住民もいました。

以上のように、A集落住民が挙げた主な危惧(n=25)は、①川魚の減少(21人)、②動物の

減少(13人)、③健康被害(6人)に分類できました。その他にも、土壌汚染(2人)、大気汚染(2人)に対する危惧も聞くことができました。

石油開発に対する住民への影響

A集落からバスで進むこと三時間、石油鉱区21内に位置する調査地セントロ・ユラルパ集落(Centro Yurupa II集落)があります。C集落では一九九五年から石油開発が始まり、現在はエクアドル国营会社ペトロアマゾナス(Petromazonas)が実施しています。ここでは、C集落の事例を取り上げ、「石油開発によって実際にどのような影響を受けているのか」についてキチュアの人びとの持っている実感を報告します。

まずC集落の歴史を見てみます。C集落と石油会社との強い関わりを見ることができます。

例えば、石油会社から集落に対し補償も行われてきました。補償の一つとして、石油会社からの集落ごとに毎年支払われる補償金があります。石油会社によって額は異なりますが、毎年五〇〇〇〜八〇〇〇USDが支払われてきました。石油会社によるC集落のインフラ整備の支援も行われており、C集落内の道路建設や小学校などの建設材料の無償援助を受けてきました。集落の創立記念祭などの資金が必要なときに、集落長が石油会社へ経済的援助を依頼したりする事例もありました。その他、集落ごとに

支払われる補償以外に、個人単位でも石油会社からの補償を利用しています。例えば、病気になる、集落近くの石油会社事務所各個人が車の手配を依頼しに行く、といったことです。

また、C集落の設立背景を見ると、一九九五年の石油開発後、石油会社からの補償金の分配を巡り住民間で対立が起きました。その対立が原因となつて、二〇〇五年、一つの集落から分離・独立する形で、C集落が新たに設立されました。

そして、C集落全世帯の収入源は農業及び石油会社での非正規雇用労働です。C集落内では、勤務経験のあるのは全世帯の六五%に当たる人たち（13世帯）でした。石油会社の非正規雇用の労働経験のある13世帯の農業平均月収が五・四USD、石油会社での月収は二四ドルであることを見ると、経済的な影響は非常に大きいと言えます。全世帯の農業平均月収は六ドルで、自その他、自給用に狩猟・漁労を行う世帯もあつた。

以上のように、C集落と石油会社は、社会的にも経済的にも強い関係を持つていと言えま

す。次に、「石油開発受け入れによってどう変わったと感じているか」を自由回答で聞き、石油開発の影響に対しC集落住民が実感している影響を見てみると、次のような声を聞くことができました。

■「以前はこの辺には何でもあつた。川魚も獲れたし。でも今はほとんどこの辺じゃ獲れないよ。」(36歳キチュア男性)【川魚の減少】

■「川魚はもう獲れないよ。石油会社が来て有毒な土砂を川にそのまま捨てていくんだ。」(50歳キチュア男性)【川魚の減少】

◆「以前はキャツサバを家の回りに栽培していた、動物たちがそれを食べに来ていたんだ。自分の畑で、クシャクシャ、という動物が

キャツサバをかじる音が一日中聞こえていた。ヒーヒーと鳴くヤマネコの鳴き声も聞こえていた。鳥もいて、鳴き声が聞こえてきたら、銃を持って外に出たもんだ。こうした豊かさはなくなつてしまつたよ。地面に穴を掘つて住んでいる動物たちは、地震探査の時の音によって逃げてしまつた。」(53歳キチュア男性)【動物の減少】

●「汚染されている川で水浴びを毎日しているから、皮膚が黒ずんでかゆくてたまらなくなつてしまつた。私の妻も同じだよ。」(50歳キチュア男性)【健康被害】

●「石油プラットフォームから処理されてない水が流れ出していて、川を汚染している。これじゃ病気にもなるよね。」(46歳キチュア男性)【健康被害】

● C集落住民が挙げた主な危惧(50%)は、①川魚の減少(6人)、②動物の減少(14人)、③健康被害(2人)に分類できました。C集落

住民の実感とA集落住民の危惧していた内容と比較すると、両者が重なる部分が多いことがわかります。

一方で、C集落住民の実感とA集落住民の危惧のズレも見られました。

例えば、石油会社によって住民間で対立が生じることに関し、A集落住民は危惧していなかったものの、C集落住民(7人)が問題と捉えていました。「R氏が会社からの利益を一人占めしようとしていた。集落ごとに割り振られる補償を巡つて対立が起つたんだ」と悲しうに語るC集落住民に会いました。こうした住民間の対立はキチュア文化に大きな変容をもたらす可能性があります。キチュア文化では、集落内での団結力・つながりを重要視しており、それを基にした相互扶助が基礎的で重要な社会関係の維持に貢献しているからです。

また、キチュアの持つ文化の一つ、ミンガ(minga 共同労働)への影響も示唆する事例も確認できました。こうした文化への潜在的な影響に関しては、聞き取り調査においてC集落住民が問題の実感として言及していませんでしたが、社会の基盤をなすものであり、今後影響が顕在化していく可能性も秘められています。

キチュアと石油開発の影響

エクアドル・アマゾンでの石油開発が推進される中で、キチュアの人びとは様々な危惧を抱いて生活しています。あるキチュアの友人と家で座りながら一緒に話をしていると「石油開発

は受け入れると大変だよ。何十年後かには、もうこの美しい自然もなくなってしまうかな」と寂しげに語っていました。こうした不安の一方で、石油開発を受け入れた集落では、補償等を利用しつつ暮らしているものの、石油開発からの影響を実感・認識しながら生活しています。

石油会社との対応を巡り、住民にとっては、石油開発の影響に関する正確な情報を共有していくことがまず必要になると思われま。また、政府や石油会社にとっては、石油開発の影響の継続的で包括的な分析を実施し、それを住民へ開示していくこと、そして、既に受け入れた住民への十分な補償提供と代替策支援を行うこと、新しく受け入れを検討する住民へ石油開発以外の選択肢を提示していくこと、が不可欠と

なる、と考えます。これらを行いつつ、今後も、住民の更なる試行錯誤や政府、石油会社による

柔軟な対応が求められていく、と感じました。
(東京大学大学院農学生命科学研究所)

- 1) 筆者は2007年6月から2009年6月までの2年間、エクアドル・アマゾンにて青年海外協力隊員としてキチュアの人びとの通う中高等学校にて勤務。また、2010年6月～8月(3ヶ月)、11月(1ヵ月)の計4か月、2度にわたり石油開発に関する調査を実施。
- 2) エクアドル・ナポ県アルチドナ市に位置する。人口は25世帯123人(2010年11月調査時)。
- 3) ルクジャクタ・サンペドロ農牧畜生産組合有限会社(Cooperativa de Producción Agropecuaria "San Pedro" Ltda. de Rukullakta)は「今後起こると予想される社会変容に伴う領域内外の問題に対し団結して対処することで、生産、経済、社会、文化、商業、政治組織の分野で公正な社会発展を促すこと」を目的に、A集落を含む17集落が結集し設立された。法的には1974年農畜産省に登録された。PKRの管理計画においては、17集落内での石油開発・鉱物資源開発を一切認めていない。
- 4) ここでは、A集落での事前協議が行われた2003年当時のエクアドル共和国憲法(1998年発効)を指す。
- 5) エクアドル・ナポ県テナ市に位置する。人口は20世帯106人(2010年11月調査時)。
- 6) C集落では、自給作物としてキャッサバ、バナナ、換金作物としてトウモロコシ、カカオ、コーヒーを栽培。C集落住民の従事する石油会社での雇用形態は、2～3カ月の短期かつ非正規雇用形態である。作業は単純労働が中心で、勤務時間は朝6時から夕方6時。土日に関係なく、2週間続けて勤務し、7日の休暇を取る。

ペルー 鵜とともに暮らす 1

古谷 桂信

ペルーが、海洋生物の宝庫であることは、日本ではあまり知られていない。ダーウィンが『種の起源』の着想を得た希少種の宝庫であるガラパゴス諸島の生物たちを支えているのは、豊富なプランクトンを含んだフンボルト海流の恩恵だ。そのフンボルト海流は、チリからペルーの沿岸を北上し、エクアドルのガラパゴス諸島ま

で到達する。当然、ペルーの沿岸もフンボルト海流に支えられた海洋生物や海鳥に溢れているのだ。

今回、私は、琵琶湖博物館学芸員の環境社会学者、牧野厚史博士からの依頼で、ペルーの海鳥であるウミウ(海鵜)の生態と、ウミウのフン(以下グアノ)利用の実態と手法を探る調査

に同行し、撮影を担当した。

この調査の背景は、野生生物保全と生業(漁業)との両立を図る上で、琵琶湖が抱えている難しい課題だった。琵琶湖では、環境破壊や魚類などの過剰な採取による資源枯渇により、徐々に湖に暮らすカワウ(川鵜)が減りはじめ、一九七〇年代には琵琶湖では、カワウの姿はほぼ見られなくなった。同じ時期、全国的にもカワウの減少は続いていた。そこで、滋賀県が中心となって実施した保護政策の効果と琵琶湖の環境のゆるやかな改善もあり、カワウの数は

一九八〇年代から回復をはじめ、九〇年代には、琵琶湖で数万羽を数えるまでになり、関係者は喜んでいた。ところが、二〇〇〇年代に入り約六万羽を超えるまでに回復したカワウの数は琵琶湖の漁業資源からすると過剰な生息数となっていました。このカワウの生息数は、漁業従事者の漁獲高にまで大きな影響を与え始めた。また、敬虔な信仰の地である琵琶湖北部の竹生島は、樹上営巣する多数のカワウのフンによって、タブの木の枯死までもが進み始めた。保護の効果が、かえって琵琶湖の生態系を狂わし、漁民の暮らしをも脅かす結果となっていました。



アグロローラルでの打ち合わせ

そこで、琵琶湖博物館では、琵琶湖に元々暮らしていたカワウと、今後、どのように付き合っていくべきなのか、県民に問いかけ、考えてもらう場として『困ったカワウ——野生生物との付き合い方——』という展示を企画した。その企画展の目玉が、ペルーのウミウの利用例だった。ペルーでは、フンボルト海流がもたらす豊富な魚に支えられ太平洋岸に多数のウミウが生息し、伝統的にウミウのフン（グアノ）を肥料として利用してきた歴史があるのだ。

二〇一一年二月二日、ウミウの保護を担当している環境省と、グアノの利用を担当してきた農業省のアグロローラル（地域農業振興局）を訪ねた。

環境省の海鳥の専門家マリアーノ・バルベルデ氏に、ペルーのウミウについて話を伺った。

マリアーノ・バルベルデ氏の話

ペルーでは、インカ時代からグアノ（フン）を肥料に使う習慣があり、インカ帝国の決まりでも「鳥を驚かせてはいけない」とされていたといえます。しかし、スペインが来て、インカ帝国が崩壊してから、グアノを利用する技は、忘れ去られてしまいました。

植民地時代には、グアノと卵と石灰を混ぜ、漆喰のような建築材料として使われていました。

一八三二年、ペルーが独立し、その後、フンボルトがペルーの海岸や、島々に大量に積もっ

ているグアノを持ちかえり、ヨーロッパに紹介しました。それから、グアノの肥料としての価値が再認識され、一八四〇年代、イギリス系の輸出会社が設立され、グアノの輸出が始まりました。このグアノ採取が再開されたときの記録では、四〇万羽も堆積していたことが記されています。ロバート・コシユマンが、『Oceanic Bird of South America』に書いています。この時、ペルー政府は、たいへんな財政難だったのですが、グアノがもたらした外貨によって持ち直し、鉄道などのインフラを整備しました。ペルーは、グアノによって救われたわけです。

一九〇九年には、グアノは取り尽くされ、枯渇し、繁殖中でもお構いなしに採取されたため、ウミウの数も激減し、約一千万羽になってしまいました。最盛期には何羽生息していたのか、その正確な数字はありませんが、何倍もいたことは確かです。

グアノが輸出されていた期間が終わり、国内の綿花プランテーション業者がグアノの肥料としての効能に注目し、国と一緒にグアノ採取会社を設立しました。そして、繁殖期に採集しないことなどを守ると、一九四五年には、約三〇〇〇万羽まで回復しました。

このころ、北米カリフォルニア沖で、イワシを取り、肥料を製造していたアメリカの会社が、取りすぎにより自国の漁業資源が枯渇したため、ペルーの沿岸部に目を付け、ペルー沖で操業するようになったのです。ちなみに、一トンのグアノを生産するために、ウミウが食べるイ

ワシは八トン、一トンの肥料（フィッシュミール）のためには、イワシ四トンです。

肥料を生産するだけなら、グアノよりも、直接、フィッシュミールとして利用した方が生産量は多いため、ペルー政府は、フィッシュミール用のイワシ漁を優先させました。そのため、せっかくながら増えていたウミウの数は、再び、減少へと転じました。ウミウが増えるかどうかは、エサとなるイワシが豊富かどうかによって決まるのです。

また、エルニーニョ現象の影響も大きい。一九九七〜九八年にかけてのエルニーニョ現象では、フンボルト海流がペルー沿岸を離れて蛇行し、イワシがまったく取れなくなり、約八〇〇万羽から四〇〇万羽まで、その数を減らしました。

二〇〇〇年代に入り、ウミウを保護し、グア



環境省の海鳥の専門家マリアーノ・バルベルデ氏

ノを取ることで自体が、その他の海洋野生生物を守っていくことになると、環境省の中でも、理解されるようになってきました。そして、グアノの生産量については、これまでは、農業省が決定してきましたが、数年前から、ウミウ保護の観点が重要視されるようになり、環境省にグアノの採取量と、取ってもいい場所と期間も決定権が移管されました。

これが、ウミウとグアノについてのこれまでの流れです。

グアノの肥料利用を進めている農業省の方針については、アグロルーラル（地域農



アグロルーラル（地域農業振興局）
長官のロドルフォ・ベルトラン氏

業振興局）長官のロドルフォ・ベルトラン氏の話を聞いた。

ロドルフォ・ベルトラン氏の話

グアノの採取は、二二の島と、一一の半島で行われています。二〇〇九年までは、アグロルーラル（地域農業振興局）が直接管理していたが、二〇一〇年から、環境省が管理することになりました。ウミウ（正確には、グアノの採取をするウミウはコルモラン種のみですが、日本人には専門的なのでウミウにしておきます）の全体の生息数と繁殖の状態を把握した上で、ウミウに悪影響が出ない形でのグアノ採取しか認められなくなりました。

グアノは肥料としてたいへん優れています。化学肥料を用いた場合、尿素、窒素、燐などをそれぞれ別々に購入しなければなりません。グアノでしたら、それだけで必要な成分がすべて含まれています。また、化学肥料を用いれば、その土地自体の力は、弱くなっていきます。グアノを使用した土地はまったく逆で、その土地の力自体が強くなります。ですから、アグロルーラルとしては、小規模自営農民にグアノの使用を奨励しています。グアノはまた、有機農法を支える肥料としても優秀なのです。自営農民には、有機農法を奨励し、付加価値を付けた野菜を輸出し、農家の収入を増やしてもらうことを目指しています。グアノの販売所は、かつては、ペルー北部と南部のピスコの二カ所しかなかったのですが、現在では、一四県二三カ所に増え

ています。

グアノの採集作業にたずさわるのは、アンデスの農民たちです。かつて大水害で集落が被災した地区の農民に生活を立て直すための仕事として、優先的にグアノ採集の仕事に就く権利を

与えたのです。それが伝統となり、現在でも、その地区の方々が携わっています。

今、採集作業しているのは、プンタ・コーレス（ペルー最南端の岬）です。連絡していますので、どうぞ、採集作業を視察してください。

□

我々は、コージェイネーター井上亜木さんがチャーターしてくれたバンに乗り込み、一七時間かけてプンタ・コーレスへと向かった。（つづく）

グアテマラ・デレゲーション報告（3月8〜22日）

石川智子、新川志保子

今年三月にグアテマラを視察したのでその報告をいたします。今回の視察目的は民芸品関連とキチエ県「希望をはぐくむ女性たち」協会訪問、そして性暴力プロジェクトのフォローアップでした。民芸品の生産者訪問と仕入れは、石川智子、新川志保子、そして去年より民芸品担当になった佐々木玲子の三人で、キチエ県「希望」協会訪問と性暴力プロジェクトに関しては、石川、新川で行いました。

「希望をはぐくむ女性たち」協会

ソシリサー一三〇号のグアテマラ基金報告でお知らせしたように、レコムからの支援で「希望」協会は組織強化プロセスを開始した。まず、研

修ファシリテーターを探し、第一回の研修を二月に開いたとのことだった。ファシリテーターはマリア・フェリシアーナ・ウフパン（チャニス）さんと、キチエ県の隣ソロラ県サンファン・ラ・ラグーナに住んでいる人だ。キチエ県のカトリック教会女性司牧の仕事の長いことしており、キチエ語も堪能で、何よりもキチエ県の状況、特に女性の状況を良く知っている。

キチエ県を訪問する前に民芸品買い付けでサンファン・ラ・ラグーナに行ったので、その折にチャニスさんに会って、すでに実施した第一回の研修（二日間）の評価と今後の進め方などについて話を伺うことができた。チャニスさんの話をまとめると、以下のとおりである。

チャニスさんの話

――研修は、戦略を立てて活動計画を作る、という依頼でしたが、まず、現在の組織の状況を把握し、それにもとづいてどのように進めていくかを決めなければなりません。二月に第一回の集まりをしましたが、その時に運営委員一人一人の話を聞き、大体の様子がわかりました。まず、気がついたことは、戦略や活動計画を立てる前にしなければならぬことがある、ということ。第一に、参加者全員が「希望」協会のメンバーだというアイデンティティをしつかりと持ち、組織として何を指すのかを認識すること。次に、一四グループすべての代表が運営委員会に入っていないことが問題です。サカプラス周辺で交通アクセスの良い人が主に参加している状態で、これではすべてのグループの意見が意思決定に反映されません。さらに運営委員会の役割が不明確だということです。マルーカさんとその妹マリさんの存在があまりに

も大きすぎ、運営委員会はこの二人に頼り過ぎています。運営委員会がどのようにこの二人から独立するかが大きな課題です。また、運営委員の中でも特定の人に責任がかかり過ぎていることもあり。具体的には書記のマリア・メヒアさんで、読み書きができるのが（マルーカさん、マリさんは除くと）彼女だけ、ということから、記録を取ったりする経験がないにもかかわらず議事録や活動記録などを担当しなければならぬように、会計記録も担当しなければならず、これらが非常に大きなプレッシャーになっていることがわかりました。

私はボディセラピーも学びましたので、これをセセッションに組み入れます。これは参加者の気持ちをリラククスさせるのと集団のエネルギーを引き出すことにとっても役に立ちます。

マリさんがディレクターの職を離れたので、これから誰がその役割を担っていくかも課題です。――

その後、三月一八日から二一日にかけてキチエ県「希望」協会を訪れた。初日は午後着いたこともあり、マルーカさんやカサ・ソシアルの人たちと雑談をしながら協会の様子などを聞く。昨年末から今までの会計をどう記録しているかなども確認したかつのだが、こちらはまだまだ始めていなかった。記録の仕方不明な点があり、私たちに確認してから始めたかった、ということだった。

翌一九日（土曜日）は希望協会の運営委員二

人（代表のマセドニアさんと会計のエレーナさん）が同行してくれてサンフランシスコ・チエのグループを訪問した。このグループについてはこれまでにも何度か「そんりさ」で報告をしているが、プランテーションの中にあるコミュニティで、農園主への無償労働を拒否したためにそれまで住んでいたところを追われて水のない荒地に追いやられている。昨年秋季に日本のキリスト者世界祈禱基金からの寄付を受けてそれをこのグループ一八人に生活再建支援として一人一〇〇ケツアルずつ渡したので、今回はそのフォローアップ訪問だった。一〇〇〇ケ



ツアルをそれぞれどう使ったか、そして彼女たちの生活がそれぞれどのように変わっているかとグループの活動をどう継続しているかを聞かせてもらった。

グループのメンバー一八人（そのうち出産で死亡したメンバーが一人いるので今は一七人）のうち集まりに参加したのは一三人だった。お金はほとんどの人が鶏、豚、七面鳥、ヤギなど家畜とその餌の購入に充てられたということで、織物をするための糸を買ったという人もいた。家畜の購入で、太らせて売ったり、卵を売ったりして現金収入が少し増えてはいるが、生活環境は前回の訪問とほとんど変わっておらず、相変わらず水はなく、水場まで往復三〇四時間かかるということだった。グループの集まりは月一回開いていて、家畜の様子などについて話し合っているということだ。このグループにはスペイン語の読み書きはもちろん、スペイン語を話す人もいないので、他のグループのようにテーマについての文書をもらってそれを読んで話し合う、ということができない。チエの町にあるマーケットに行くことはあっても、それ以外の場所に行く機会はなく、「希望」協会の運営委員やマルーカさんが訪問しなければ学ぶ機会はない。前回は建設中だった小学校はほぼ完成しており、クラスは始まっているということだった。だが、建設費用は住人負担なので、その支払いに低地のプランテーションに出稼ぎにいかなければならない家族も多いのだという。

3月20日(日)午後

運営委員会とのミーティング

レコムからの支援はすでに今年一月に送金してあるので、今年度のこれまでの活動についてなどを聞いた。支援は①運営委員会の活動経費②組織強化のための研修(ファシリテーター費用)③サンフランシスコ農園のグループへの生産活動支援④文書管理のためのアシスタント雇用に使うということで合意していた。

まず、協会のお金はすべて運営委員会が管理するようにになっていたのが前進だった。会計のエレーナさんと書記のマリさんの連名で協会の銀行口座はすでに開いていたが、それを使い始めている。外からの支援に対して報告の必要性(特に会計報告)は、前回の集まりではあまり納得した様子ではなかったが、今回の集まりでは、皆の共通認識として定着していた。また、現在「希望」協会への支援はレコムからが唯一で、これがなければ自分たちの活動を続けられない、ということ、レコムに対して何度も感謝された。これまではお金のやり取りや連絡はすべてマルーカさんを通じてだったので、運営委員たちも漠然と「日本からの支援」としか受け取っていなかったが、レコムとのこれまでの協議や今回の視察を通じて、もっと直接、具体的に支援を実感してもらえているようで、それが記録を取る、などの責任感にもつながっているように見えた。①の活動経費は、今年一月末から三月半ばまでに、運営委員全員が一四グ

ループすべてを訪問するのに使用された他、毎月の会議への参加費用として使われている。参加するたびに交通費と食費が支給されるが、受領書をリストにしてあって、お金を受け取った人はそれにサインする。②の研修については、まだ一回やっただけだが、運営委員の評価も高く、この研修を行っていることに皆満足していた。ファシリテーターという外の視点が入ること、組織運営に何が必要で、そのために何をしなければならぬか、を具体的に考えいこうことを皆重要だと認識していた。③は、この分を別のことに使いたいという要請があった。サンフランシスコのグループの状況は依然として厳しいものの、昨春秋の支援があったので、その分だけ楽になっていること、同時に他のグループから研修やワークショップにもっと参加したい、という要望が多くあり、サンフランシスコの分をこれらの参加費(交通費や食費)に充てたい、ということだった。現在は資金がないためにグループの女性たちを参加させることができないのだということだった。(これは後にレコムの運営委員会で検討して、こちらの方がレコムの支援目的により沿っているということで承認された)④のアシスタントはまだ雇用していなかったが、(元)奨学生の一人を選ぶという事で確認した。

組織強化研修のその後

チャニスさんより、第二回研修が終わってから簡単な報告をメールでもらった。第二回目は、

運営委員会が機能するために一人一人の役割についてと、運営委員会と参加一四グループとの関係を委員の負担を増やすことなくどう強化していけるかを中心に話し合ったということだ。会計処理などの文書作成を行うために奨学生から一人探して手伝ってもらうことも確認した。また、メンバーのアイデンティティ強化のために「希望」協会のロゴを作ることに、協会の活動を通して自分たちがやっていきたい社会的な活動などを具体的にしていくことも決定した、ということだ。次の研修では、協会のビジョンとミッションについてと運営委員一人一人が自分の活動に自信をもち、運営委員会内部での相互の信頼関係を強化するためのセッションを行うということだった。

視察を終えて

収支記録等まだこれから改善してもらわなければならぬ部分が多いが、活動とレコムの支援金使用の内容について「希望」協会運営委員との再確認ができたこと、運営委員が活動に向きでいるのを知ったのは成果だった。また、始まったばかりだが、組織強化研修が良いスタートを切っているので、今後に期待したい。

性暴力プロジェクト アップデート

昨年三月にあった「戦時下性暴力についての民衆法廷」の後、メンタルヘルス組織「社会心理行動と共同体研究グループ」E C A Pと女性組織「グアテマラ全国女性連合」UNAMG、

女性弁護士団体「世界を変える女たち」MTMが連携して活動している。MTMが法的支援、E C A P が社会心理学的側面からの同伴活動、U N A M G が情報共有と意識化について活動。三者間で毎月一度のミーティングを実施。コミュニティラジオなどを通して民衆法廷の判決を共有したり、性暴力についての意識化を行っている。

この三団体はプロジェクトに参加している四県三地域（ウエウエテナンゴ県、チマルテナンゴ県、アルタバラス県とイサバル県）の女性たちと協議を重ね、今後の活動の方向性として以下の二つを考えている。

一つは、国に対する補償と責任追及。失った土地や所有物に対する補償など、民衆法廷の勧告に沿った要求をあげる。米州人権委員会／人権法廷に提訴する。国の責任、補償、改善のための勧告を求める。アルタバラスとイサバル、チマルテナンゴ、ウエウエテナンゴのすべての地域で女性たちがこれを希望している。二〇一一年一〇月に米州人権委員会に提訴するための準備を進めている。

二つ目は、国内裁判で直接的加害者の責任を追及すること。二〇一一年から三年間、毎年一つのケースを提訴する予定だ。一年目の今年は、アルタバラス県セブルサルコの集団ケースに取り組む。複数（九〜十三人）の原告候補者があるが、最終的な原告人数は現状では不確定。原告は一九八二〜八六年にかけて軍により性奴隷にさせられた女性たち。国内裁判に持ち込む

根拠は、刑法の人道に対する罪で、告訴は今年六月を予定している。直接加害者は、軍事コミットシヨナーと兵士。軍事コミットシヨナーは、住民のリストを持ち、誰がいつ駐屯地に奉仕に行かなければならないか指示していた。軍事コミットシヨナーは地元在住なので、女性たちにより特定されているほか、兵士のうち二人が特定されている。まず何人かの被告を特定してプロセスを始め、軍上層部の命令者の責任追及に到達したい。当時アルタバラス県ポロチック地方には七箇所の軍の駐屯地があり、一つ一つが違った役割を担っていたこともわかっている。女性たちの証言によれば、内一箇所には、二つの大きな穴があり、一つは拷問用、もう一つは死体を埋めるためのものだった。アルタバラスのサイババーの一人が強かんされるといふ事件が今年二月に発生した。加害者は二〇〜三〇代の男性六人。プロジェクトの活動とは無関係の犯罪と考えられるが、改めて女性たちに恐怖を植えつけている。

二年目の二〇一二年は、チマルテナンゴ県のケースを提訴する予定。原告は一八〜二〇人の女性たち。そのうち少なくとも四人は、強かんにより妊娠し、出産した。地域の中で母親も子どもも周囲住民から排除されてきた。女性たちは当初は裁判に持ち込むことを望まなかったが、研修のプロセスで裁判の可能性について議論し始めている。個人と集団の訴訟を検討する。また、平行して判事等司法関係者への研修を実施している。昨年一回目の参加者は一五名、内

半分は地方判事だった。テーマは、ジェンダーと性暴力。皆こうしたテーマでの研修参加は初めてだった。Justicia Transicional(トランジショナル・ジャスティス、内戦下の罪を平時に裁く。司法だけでなく社会の中で人権侵害の被害者に正義をもたらす概念らしい。人道に対する罪なので時効はない)判事及び検事を対象として国際人権条約や性暴力の調査・立証の手法等に関する講座も実施していきたい。

昨年の民衆法廷の成果として、ペルー、コロンビアでも民衆法廷実施を準備していることがあげられる。現在グアテマラから二人がペルーに行き、経験を共有している。

グアテマラの最近の状況 強制排除

今年三月に入って、様々な地域で土地からの強制排除が続いている。中でもアルタバラス県ポロチック地方で、精糖企業の土地とされる三〜四コミュニティが立て続けに排除された。内一コミュニティは、住民四〇人程度のところ、五〇〇人ほどの武装した警官・兵士・企業に雇われた農民が乗り込み、家屋から退去させられた。その後家屋に放火され、家畜や、住民がかかるうじて持ち出した所有物などを奪おうとし、住民が抵抗すると、細粒ガスや実弾を発せられた。目撃者(E C A P のプロモーター)の証言によれば、住民の一人は頭部に銃弾を受けて死亡した。現場に居合わせた目撃者は、E C A P より二人、地域で活動するN G O など。判事による強制排除令状はあったが、それ

前にこの地域の土地の正式所有に不明確な点がある。また、強制排除を行ううえでも基本的人權や所有物は尊重されるべきである。現場で検証する義務を負う人権擁護局他のプレゼンスもなかった。

このところエスクイントラ県パリンやレタルウレウ県などでも強制排除が行われているとのことだった。コロン大統領は、様々な地域での土地問題等に関する対話テーブル（土地を占拠する農民、所有を主張する地主、政府機関等の間で、解決策を模索する協議の場）を中止することを発表。農民組織等は「農民に対する戦争宣言」として非難している。

上述ポロチック地方での同製糖企業によるコ

サカプラス 鉾山開発に関する住民協議

グアテマラ各地で、鉾山開発や水力発電事業への拒否を表明する住民協議が相次いでいる。

キチエ県サカプラスでも二年ほど前から、コミュニティリーダーたちが、他地域での鉾山・水力発電による問題とこれに関する住民組織の運動や、この地域の資源開発に関する公文書（鉾山省他）などの情報を共有することからはじめ、この五月二〇日には住民協議にいたった。

この地域の鉾山開発について、鉾山省の情報によれば、サカプラスとその北クネンにまたがり、現在採掘二件、探掘七件のライセンスがあ

コミュニティへの攻撃はその後も続いている。強制排除された農民は、かろうじて焼かれずに残った畑のトウモロコシを収穫し、周辺コミュニティに助けられながら生活しているが、五月一三日、製糖企業のガードマン三〇人程に発砲され、三機のヘリコプターから手榴弾等を投げられ、残りのトウモロコシ畑を破壊された。別のコミュニティでは、五月二一日、畑で働いていた農民たちに製糖企業のガードマングループが発砲、一人が二五発の銃弾を受けて死亡、ほか少なくとも三人が重傷を負っている。この畑はコミュニティの協同組合の正式な所有地で、その権利証書も持っているという。

年一二月、自治体として鉾山開発を認めない旨を表明した。

同協議会は、情報をより広く住民と共有するため、「水と大地は地域のため、企業のためではない」を合言葉に、三月二日から四月五日の間で四ヶ所で地域別集会を開催、延べ二〇〇〇人ほどが参加した。ここで、グアテマラの他地域ですでに起きている鉾山開発による問題（特にサンマルコス県のマルリン金鉾山）、鉾山開発が地域に与える影響（水・大気汚染、健康障害、森林破壊、立ち退き他）などとともに、地域で進められている鉾山開発プロジェクトについて情報を共有、住民協議開催を要求する住民の意思を統一してきた。

四月九日には、サカプラスの中央公園で住民集会を実施、地域の環境、自然資源を守るために、自治体による住民協議開催を五月二〇日に決めた。

五月二〇日、住民協議は午前中は各コミュニティで、午後は中心部で行われた。子どもたちを含めて全住民が参加でき、サカプラスでの鉾山開発を認めるか否かの質問に対し、挙手で住民が答える形をとった。全体としてよく組織されており、特に問題もなく進行了たようである。結果は、圧倒的に鉾山開発反対。

希望協会の女性たちの話では、今年に入ってから鉾山問題についての情報や、住民協議開催への動きが耳に入るようになり、三月から開催された上記地域別集会にもできる限り参加して

きた。各コミュニティの集会でも情報が共有されたようである。女性たちも皆反対を表明していたとのこと。私が話した数名のメンバーは、反対の理由として、環境破壊や水の流れを変え

民芸品生産者訪問記

はじめに

私は今年三月、グアテマラの三つの民芸品生産者団体を訪れました。昨年九月に担当に就任以来、創り手の方々に会いたいと願ってきましたが、みなさまのおかげでこの度商品仕入の旅に同行するかたちで実現いたしました。厚くお礼申し上げますとともに、旅の様様をご報告し、今後の事業への提案をさせていただきます。

第1部 旅の様様

グアダループ共同組合

ここは内戦時代に、先住民の女性たちが軍による暴力から暮らしを守るために連帯して生まれた組合です。メキシコ国境へ向かう幹線道路から山間へ、車で一五分足らずの小さな町チマルテナンゴ県ポアキル市に本部があります。建物はコンクリートづくりの二階建てで、縫製室・商品保管室・事務室からなり、小さなパン

られたり水不足になることなどの不安、また自分の利益のみを追求する企業のお金の手段として地域が使われることへの怒りなどを話してくれました。(石川智子)

佐々木 玲子

屋兼カフェも併設されています。

今回は一〇名あまりの会員の方々とお会いすることができました。その中には、マリアナ・チュタさんの姿も！彼女は一昨年一二月にシコムが日本各地で開催した講演会ツアーで、スピーカーとしてお招きした方です。現在の会員数は二〇〇名で、多くが内戦中に夫を軍に殺された女性たちです。雇用が限られるこの町で、家庭責任を一身に背負う彼女たちにとって、手工芸品は現在も大切な収入源です。布製のポーチや台所用品を中心に取り揃えています。

協会には近年ミシンが導入されたため、バッグ類など多様な商品の生産が実現。今では事務室にパソコンもあります。商品はコード番号が付いていて、写真もデータ化済み(保管室内に整然と結束されて並べられ、大切に扱われている印象を受けました)。経理処理もデジタル化されて明細付領収書も発行でき、組合は安定的・計画的な生産体制が整った状況にあります。一方、課題も残っています。女性たちは主に

織物で生計を立てていますが、根気と時間の要る手仕事に変わりはなく、どこに誰に自分たちの作品をアピールしていけばよいかについての情報を持っていません。私たちレコムはこの点で支援ができると思われれます。

アディサ (ADISA)

ここは、雇用機会の少ない地方都市住民の中でも、特に貧しい生活を強いられる障害者とその家族が立ち上げた自助組織です。本部は火山と湖の美観で有名な観光地。パナハツチエルから、船で約二〇分のサンティアゴ市内にありました。中央教会と市場の裏手の閑静な界限で、二階建の一階部分に作業場・商品展示室・事務室があります。廊下や敷居部分を除けばバリアフリー構造ではないので、一般の民家を改装したものと思われれます。展示室は八畳ほどと広めです。建物の外から室内は見えませんが、壁には所狭しとビーズアクセサリーが光っており、印象的にみせる工夫がされています。新聞や雑誌でできた大小の果物籠などの台所用品もあります。こちらは派手ではありませんが、現代美術を思わせる斬新さです。

ここでお会いしたのは事業コーディネーターのホセさん。自らも車椅子生活者です。会員間の連絡・相談・健康管理、商品の生産・販売は彼が統括しています。作業場では一〇人ほどが製作の真つ最中でした。雑誌の色刷り広告を細長く切り抜いたものを、指先に力を込めて固く巻いて糊付していきます。長さ1cmぐらいの巻

貝のような塊ができるので、これにニス塗って乾かします。最後には何個も重ねてネックレスにするのだとか。神経を使う仕事にも関わらず、穏やかな表情で話してくれたのが驚きでした。

ビーズ製品は、モスタンシージャという別の女性団体が製作し、ADISAが受託販売しています。この団体は、二〇〇五年にこの地方を襲ったスタン台風による大規模な土砂崩れで農地を失った女性たちが、生活再建のために組織しました。(実は私は先に駆けて、手工芸の難しさを肌で感じようと思い、ビーズネックレス作りに挑戦しました。直径三mmの玉二〇〇個を糸に通していくのですが、二〇分もすると目が痛くなってきました。そのうえ真っ直ぐな鎖を作っているはずがだんだん振れてきて、最後にはアレ? という感じに)。残念ながらこちらのグループの方とは会えませんでした。その労力は作品を見れば瞭然でした。

ホセさんのお話では、販売事業で会員の生活を保障しきれないほどの利益は上がっていないようですが、「ものづくり」の現場はインフラも医療サービスも充分ではない町で、障害者と家族、地域の人々が集う場所としても機能しているように見えました。

また、自身の参考にと日本から手芸初心者用の書籍を持参していたのですが、創作のヒントがありそうだという意見をいただいたため、差上げました。写真に、ビーズの種類や糸の太さまで書かれた設計図まで載っている本だった

ので、経験者なら真似て作ることもできそうです。

考えてみれば、グアテマラの地方生活者の行動範囲は私たちが思うより狭いはず。交通の不便な地域に住む彼女らにとっては、異なったセンスの持ち主の作品を目にするのは、たとえ書籍越しであっても創作意欲を刺激されるのかも知れません。デザインが多様化すれば売上が増え、それを元手に例えば現行のプラスチックビーズにも形の違うものを取り入れたり、大胆なカッティングや、あえて表面の光沢を抑えた洗めのガラスビーズ、金属のピースなども使って、彼らにさらなる自己表現の手段を提供できます。私たちは、まず彼らの作品群をより多くの人に見てもらい、その評価をフィードバックすることが大切だと考えます。

サンホセ女性手工芸家協会

ここは、サンファン・ラ・ラグーナという町の土地を持たない女性たちが、唯一の収入源である織物を共同販売することで、生活の改善を図る目的で設立されました。祖母の時代まで行われていた、身の回りにある植物など地域自然資源による天然染料染の糸を使った製品を売り、伝統を回復しつつ「他にない上質のものを」作り出していくことを使命としています。

本部は前出のサンティアゴ市から、船とオート三輪車を乗り継いで一時間足らずのところにあります。市街地のはずれに近い、奥行きのある平屋と前庭を備えた、典型的な農村の家です。

洗っても色落ちしない綿一〇〇%のマフラーやバッグ、テールブルクロスなどを販売しています。協会にはミシンがないので、町の土産物店のように多品目の扱いはありませんが、通りからも見える軒下で、日干し煉瓦の壁をバックに商品が並んでいました。中南米の民芸品と聞いて思い浮かぶ原色のはむしろ少数派で、多くは明度を抑えた中間色です。モノトーンから複雑な色調のものまで、バリエーションの多さに驚かされます。

ここでは染色工程も見学しました。まず、近くの山から原料の植物を採ってきて大鍋の水に入れ、沸騰させて染液とします。これに白い綿糸の束を、色を定着させるためのミョウバンなどの媒染剤溶液と交互に漬け、煮てはすぐこを繰り返して乾燥させます。完了まで二日かかります。

一見単純作業ですが、原料に含まれる色素の濃度、煮出すときの水の量や時間が異なるので、色の再現性は高くありません。協会では現在、某国際協力団体から来た技術者が正確な計量を指導しています。スプーンや秤を使って数字にこだわりの作業は、彼女たちにはまだ目新しい習慣ですが、品質改善に繋がるならという意思で取り組んでいます。

注文した品物は支払いの前に、染めムラやつれがないかどうか、入念に確認しました。よって、レコムでは従来通り「一点つつ手作りで世界に一つ」と魅力をアピールすればよい考えます。

第2部 提案

旅を通じて、私は民芸品生産者たちの自立的な生活を営もうとする意志を感じ、その作品はもつと価値を見出されるべきものという確信を得ました。よって、今後の民芸品の販売促進のために、以下の具体的な行動を提案したいと思います。どの団体も目下のところ大量生産は難しく、仕入や輸送コストも無視できませんが、一度検討する価値はあると考えます。

ただし、私は単にビジネス化を勧めたいのではありません。生産者たちは、内戦中に軍によって家族を殺されたり家を焼かれたりと凄まじい暴力に傷付けられながらも生き延び、先住民族として生きる権利、自らの誇りと文化を回復しようとする努力がなされました。経済的な問題も当然存在しますが、困難な中で次世代を育てています。

レコムは発足以来、グアテマラ先住民族への支援を柱としてきました。私は、この方針を今後も継続することに同意し、そのためのキーワードを「日常化」と理解しています。

民芸品の販売、言い換えれば私たちが、着るもの、飾るもの、オフィスに持っていくものなど日常使う品々を小規模生産者から買う習慣を広めれば、彼ら彼女らが望む暮らしを作っていくための息長い財政支援になります。

また、自分たちができることを模索し、連帯してより良く生きるようにするのその活動は、

グアテマラ以外の国でも、未だ生きがいをとるか食べていけるだけの収入をとるかの二択を迫られ閉塞している、どこにでもいる市民を支援の輪に取り込むヒントを内包しているでしょう。

もちろん、レコムとして限られた成員と資金でいかに有効な支援を行うか、対費用効果や結果を支持者に説明し、事業の継続性を確保する努力も必要です。私たちは節目を迎えているのです。

- 1 通信販売開始準備を引き続き進める
- 2 商品説明用下げ札を導入する
- 3 対面販売の機会を増やす

① レンタルスペースの活用

例えば、京都市中京区大宮の三条商店街では、空き店舗をなくすために、一日あたり七〇〇〇でロットを借りられる制度を設けています。こうした活動を利用できるかも知れません。

② 委託販売の検討

フェアトレード製品については、生産者・支援団体複合体と消費者とを結ぶ中間支援として、委託販売を行うNPOや株式会社があります。費用や商品管理を誠実にしてくれるかなどを調べたうえで利用するのもひとつの方法です。既に取引のある事業体をご存知の方は、ご紹介ください。

参考＝ People Tree, <http://www.peopletree.com>

01p

③ 自治体の定期市に出店する。

こうした市には、自らも「ものづくり」に関わる人たちが集まるので、手作りの品の良さを労力や作る喜びまで含めて理解できる客層の獲得が期待できます。こうしたターゲットを予め絞った売り方も試してはどうでしょうか。

④ 民族雑貨の市場調査を行う。

個人的には、レコム民芸品の価格はビーズ製品（キーホルダー、ブレスレットなど）が800～2000円、布製品（マフラ、シオルダーバックなど）が2000～4500円と問屋直営店なみの安さと思えますが、市場調査のノウハウを持つ方の協力を得られれば実施してみてもどうかと考えます。

おわりに

今回の旅を実現させていただいたみなさまに、重ねてお礼申し上げます。今後担当としての役割に一層邁進して参ります。ご多用中とは存じますが、民芸品事業に関するご意見をお寄せくださいますよう、お願い申し上げます

連絡先 090-3872-0171

E-mail: z5c3k-n5g61@hotmail.com

連載第三八回 『ラ米百景』

伊高浩昭（ジャーナリスト）

第56景

大人になりきれないMVL

ペルー人作家でスペイン国籍も持つマリオ・バargasジョサ（MVL）は二〇一〇年一月七日ストックホルムで、ノーベル文学賞受賞（一〇日）に先立ち、五分間の記念講演をした。

「私は五歳で本を読み始めた。それが夢を人生の現実にし、人生を夢にしてくれた。歴史を小説化するのには容易ではない。フロベール、フォークナーから学んだ。ペルーは当時、識字者が少なく書籍市場が小さな国だったが、私は書き続けた。読み書くことは、不正と闘うことだ」、「ラ米の用語を生んだフランスには、ラ米発見を感謝する。ガブリエル・ガルシアマルケスら名だたるラ米作家たちは、ラ米が知的な大陸

であることを示した」。

次いで「私は若い時、社会主義を信奉した。だが、その過ちを捨ててからは、自由と民主のために闘い続けてきた」と述べ、キューバとベネズエラを非難し、両国の人民を讃え、ボリビアとエクアドールを批判した。MVLはいまから四〇年前の一九七一年、キューバで詩人エベルト・パディージャが「反革命」の嫌で逮捕され自己批判を強いられた「パディージャ事件」を機にカストロ体制と決別し、反共陣営にのめり込んでいった。

講演でさらに、アウグスト・ピノチエー（チリ軍政独裁者）とフイデル・カストロ（キューバ革命の最高指導者、現在はキューバの精神的指導者）らを独裁者として列挙した。そのうえで、「私はペルー最後の独裁時代（藤森政権下）で国籍を失いかけた。そのころスペインが国籍を与

えてくれた」とスペインに謝意を示した。続けて、「スペイン征服者たちを批判するのはいいが、その彼らの多くが我々の祖先であることを忘れてはならない。先住民族を現在のような状況に放置している責任は、私たちを含む皆にある」と述べた。

「何度も書くのを止めようと思った時があったが、いつも妻が励ましてくれた」と、傍らにいた妻を讃え、妻がもらい泣きする場面もあった。安っぽいメロドラマのような、何とも言い難い見苦しい一幕だった。記念講演を利用して、気に食わないラ米諸国をやり玉に挙げたのも、前代未聞のことであり、この作家の狭量さを余すところなく示した。

二月一三日凱旋帰国でリマに到着するや、群がる報道陣の前に、二〇一一年四月一〇日の大統領選挙を遠望して「独裁者の娘（ケイコ・フジモリ）が大統領になるのを全力で阻止する」と宣言した。ケイコは翌日の新聞で、「MVL氏のノーベル賞受賞をペルー人として誇りに思う。私は泥棒や殺人者の娘ではない。平和の大統領の娘だ。MVL氏を作家として尊敬するが、政治では彼を恐れはしない」と上手に切り返した。ここはケイコの勝ちだった。MVLは一九九〇年の大統領選挙に

当選絶対確実と信じ込んで保守陣営から出馬し、第一回投票で確かに一位になりはしたが、その時点で、二位だったフジモリが三位以下の票を集めて当選するのが確実視されていた。MVLは決選進出を止めようとしたが、卑怯だと非難され、思いとどまった。その結果は、惨憺たる敗北で、かつて味わったことのない屈辱だった。それが許せないのだ。父フジモリ憎しが、娘のケイコ憎しに直結している。意識下には、スペイン系白人優越主義が潜んでいるに違いない。MVLは嫌気がさして、ペルーを離れた。そこでスペイン国籍を得るに至っただけの話だ。

二〇一〇年末当時、前リマ市長ルイス・カスターニエーダが有力候補だった。前大統領アレハンドロ・トレードも有望だった。トレードの下で首相だったペドロ・クチンスキも希望を抱いていた。だが元軍人オジヤンタ・ウマールと、国会議員ケイコにも可能性がないわけではなかった。ウマールは前回選挙の第一回投票で得票一位になりながら、「急進性」を恐れられ「不確実性」を嫌われて、二位だった現大統領アラン・ガルシアに決選で油揚げをさらわれた苦い経験の持ち主だ。ケイコには、貧困大衆に依然人気のある獄中の元大統領アル

ベルト・フジモリの「フジモリ」という、侮れない（銘柄）がある。六月五日の決選投票でウマールとケイコが政権の座をかけた争う構図は、決して非現実的なものではなかった。

「そうなれば、癌かシーダ（エイズ）か最悪の選択になる——MVLはそう言っただけからなかった。ひどい言葉だ。ノーベル賞作家ともあろう者が、差別的発言をしていることに気付かなかったのだろうか。この作家は、人間として文学者として、至らなさを自ら暴露してしまった。四月の大統領選挙が近づくと、MVLは「ケイコ当選絶対阻止」を言い続ける。自分の影響力が選挙民の投票傾向を左右できると過信していたのだろう。意中の候補はトレードで、クチンスキ、カスターニエーダも許容範囲に入っていた。つまり、ガルシア政権の親米・新自由主義路線の継承者ならばよかったのだ。私は二〇一一年二月半ば、リマとその郊外を取材したが、当時はトレードが最有力候補にのし上がっていた。それは、トレードの選挙ポスターが圧倒的に多いという、目に見える形で示されていた。ケイコのポスターは、意識的に探さないと見つかりにくかった。ウマールのそれも、さほど多くはなかった。ポス

ターの存在感はトレードの選挙資金の豊かさを物語り、彼自身もすっかり勝ったつもりでいたのだろう。

ところが、決選に進出したのは、ウマールとケイコだった！ 作家にとっての「最悪の選択」は現実になった。トレードは、かつての部下クチンスキに三位の座を許し、四位に甘んじるといふ屈辱をなめた。MVLは、投票日直前にトレードとクチンスキの「候補者一本化の必要」を口にし、暗にクチンスキに出馬を取り下げるよう要求していた。クチンスキ、トレード、カスターニエーダの三者の討ち死には、MVLにも衝撃だった。ペルーの貧しい多数派は、ウマールとケイコに未来を託したのだ。新自由主義は選挙で敗北し、MVLは「道徳的敗北」を喫した。

MVLはこの六月末、東京麹町のセルバンテスセンターや東京大学で講演する予定だ。そのころには次期大統領が誰か決まっている。もはや、見苦しい政治的発言は聞きたくない。ノーベル賞作家の右翼節や新自由主義節など何の価値もない。いままも健筆を揮っている大作家に、もうそろそろ政治的自己顕示欲を捨て、大人になってもらいたい。

音楽三味♪ペルーな日々(第40回) 「シクの響きに魅せられて」

プーノによく通っていた頃、町のシクの合奏団に混ざっていたので何度か演奏する機会を得た。プーノ県下のシク合奏団が一堂に会するコンテストで演奏し、祭りでは町中をパレー

ドし、夜明けまで丘の頂上で凍えながら演奏した。厚い音の渦の中で笑い、吹き、歌い、そして飲みながら過ごしたあの高度三千八百メートルでの日々は今なお忘れ難い思い出だ。大音量で頭くらぐらになりながらシクを吹きまくった日々。今日はそんなシクのお話をしたい。

いきなり、「シク」という言葉聞いて、ああ、あれか、と思う人はアンデス音楽通だといってもいいだろう。シクはサンポニーヤという一種で、一般的にサンポニーヤという名前で知られている楽器だ。誰でも子供の頃には瓶の口に息を吹き入れて鳴らしたことがあるだろう。サンポニーヤとは、そうやって瓶を鳴らす要領で、一列に束ねられた長さの違う菅を鳴らして演奏する楽器だ。シクの他にもエ

た。そしてそのなかでもっとも発達したのが、ペルー南部からボリビアに続く標高約四千メートルの高地大平原アルティプレーノで演奏されてきたシクだろう。

シクは、二人一組で一つの音階を交互に受け持つて演奏する楽器だ。つまりドミソシ側とレファラド側に分けられた楽器を持つて向い合つて演奏するわけだ。実際には二人だけで演奏することはほとんどなく、多くの場合、大人数で同じメロディを演奏する大合奏で使われる。現在一般にサンポニーヤと呼ばれている楽器は、このシクをひとりで演奏出来るように改良した現代楽器だ。ちなみにこのサンポニーヤは、も



ともとスペインではバグパイプに代表されるパイプスの一種の名前だったと言われている。それがなぜアンデスで似ても似つかぬ形のシクを指す名前になったのかは想像する他ないが、パイプスの倍音を多く含む分厚い音の響きと、シクの重厚な音に共通点を認め、便宜的に呼び始めたのが定着したりしたのではないか。

またシクは、楽器の大きさや形状、共鳴管の有無などいろんな種類に分かれており、それぞれ独自の名前を持っている。そしてそれぞれの地域や楽器編成、演奏される場によって、その音楽自体もさまざまな名前で呼ばれる。一般的にシクの合奏はスクーリと呼ばれる。しかし、特定の楽器を使っていたり、特殊な編成や楽曲、状況に合わせて演奏される音楽は、例えばアヤラチやチリグアノといった特定の名前で呼ばれる。ちなみにアヤラチは本来死者を送るための儀礼音楽であり、コンドルの羽で勇壮に着飾つて演奏される。

シクは、元来二人一組で一つ音階を構成する楽器であるが、合奏では三〇人とか五〇人、中には百人を超える楽師たちによつて演奏される。一つのメロディをこの大人数で倍音を響かせながら吹く只中にあると、その音の圧力に圧倒される。自分が演奏者として加わっているとさらにその感動は倍増する。スクーリでは、イラと呼ばれる六本管パートと、アルカと呼ばれる七本管パートにそれぞれが分かれて合奏する。音階を交互に等分しているがゆえに、まさに息をぴったり合わせないと音楽にならないこ

の演奏方法は、合奏によって心を纏り合わせる音楽でもあると言える。時に打楽器を伴ったシクの合奏団は、小幅に歩を進めながら楽器に喰らいつくかのように背を丸め、大迫力でバリバリとシクを吹き鳴らすのだ。

現在、ペルー南部、ティティカカ湖のあるプーノ県では、現在毎年二回のコンテストが行われている。一つは二月のプーノ市最大の祝祭「カランダリアの聖母の祭り」に合わせて市内で行われるもので、もう一つは、九月にプーノ県下で持ち回りで行われるコンテストだ。共に、県下の町や村から参加した数多くのシク合奏団の演奏が競われる。編成もさまざま、かつ衣装も千差万別のコンテストは、見ているだけで興奮する一大スペクタクルだ。コンテストはスタジアムや体育館で行われ、ブラスバンドのドリル演奏のように隊列をつぎつぎに変えながら演奏する。コンテストとともに発展したこの演奏のスタイルは、近年どんどんステージパフォーマンスとして洗練と革新をもたらしている。コンテストでの演奏が終わった楽団たちは、演奏しながらそのまま町へと飛び出し、住民の喝采の中町中を夜遅くまで練り歩く。要所要所で準備されたビールを飲みながらその演奏は果てることなく続く。シクの好きな人達は街路に鈴なりになって楽隊を待ち構え、追いかけ、間近でその音の迫力や凝りに凝った衣装などを心ゆくまで楽しむのだ。

私がこうしたシク合奏団に初めて参加させてもらったのは二〇〇一年のことだった。知り合



いから、プーノにそびえる丘ワフサパタの麓の地区の住民で構成されているワフサパタ地区アルティプラーノ合奏団と一緒にコンテストで吹いてみたいかと声をかけていただいたのをきっかけに、合計コンテストに三回、カランダリアの祭りで一回演奏させていただいた。アルティプラーノ合奏団は、総勢四〇名ほどのわりと小さな楽団で、タブラシクという節を持つ葦で作ったシクを使い、大太鼓、小太鼓、シンバルの三つの打楽器と共に演奏するシクモレーノという編成の楽団だ。夕方になると地区の四つ角から大太鼓をドーン、ドーンと叩く音が聞こえてくる。その音に誘われるように集まったメンバーたちは、車の通る道路をジャックして

おもむろに練習を始める。周りの家からはぞろぞろと人が出てきてその様子を飽きることなく眺めている。彼らは、コンテストで演奏する四

曲ほどの曲だけでなく、十曲を軽く超える曲が練習曲となつているのは、コンテストの後、町中をパレードしてまわるからだ。しかも、これらの曲はみな歌詞が付いていて、突然歌い出したりもする。新しい曲もすべて耳コピだ。若者から年配者まで男達だけで構成された楽団は、コンテストに向けて熱く燃える。団長は持ち回り制で、コンテストの時のバスの手配や当日の食事や衣装などをすべて準備しなければならぬ名誉職だ。皆自分の団長つぷりをどうアピールするかでいろいろ試行錯誤を重ねる。これがカランダリアになると更にエスカレートする。たくさんの踊り隊が楽団を取り囲み、町の加熱具合も半端ない。数日シクを吹きつぱなし歩きつぱなしのハイテンションな祭りを過ごし、いつも最後は酔っ払って終わるのもまたアングデスの祭りの醍醐味である。

なんだか、今回は期せずして個人的体験を多く書いてしまったが、こうしたシク合奏団の多くは、プロではない地域の楽団だ。そのため、有名な楽団などもあることはあるが、基本的には地元根ざしたローカル色豊かな楽団である。録音も流通量は少ないが、探せばいろいろ出会えるので、興味のある人はぜひいろいろ聴いてみて欲しい。こうした楽団が有名な町としては、例えば、ワンカネー、ユンググーヨ、モオー、タキーレなどがあげられる。そしてもし聴いて面白く思った方がおられたら、現地の生で聴くシクラーリをぜひ体験してみても貰えたら望外の喜びだ。

(水口 良樹)

豚肉とピーマンの炒め物

CARNE DE CERDO AL PIMIENTO



●材料（4人分）

- ・豚肉薄切り 400グラム
- ・好みの色のピーマン 2個
- ・ごま油 大さじ2杯
- ・タマネギ小 1個
- ・コショウ
- ・塩

●作り方

- 1) ピーマンを洗って種と茎を取り除き、長細く切る。
- 2) タマネギを縦に割り、薄く細めに切る。
- 3) まず、切ったピーマンとタマネギを軽く炒め、豚肉を加え、塩コショウで味をととのえる。
- 4) 大きめの平皿に盛り、ご飯やトルティーヤ（トウモロコシでも小麦でも）、あるいはフランスパンを添える。
- 5) 左党の方は赤ワインと一緒にどうぞ。

ミゲル・アクーニャ メキシコで
 中学・高校の英語教師をしたあと、
 1986年来日。「FM COCORO」でD
 Jをつとめた。現在、大阪の下町・天
 満で「メリダスペイン語教室」(<http://www.merida-mex.com>)を主宰。

今回の料理は、メキシコ中で食卓にのぼる「豚肉とピーマンの炒め物」です。この料理には、2つの大陸の味の融合を象徴する重要な食材、ごま油とトウガラシ（ピーマン）を使います。ごま油は、アジア原産であり、中東諸国やインドでは古くから利用され、中華料理や日本料理でも重要な食材です。現在では、アメリカ大陸や地中海諸国、アフリカでも使われています。ラテン語の学名は「SESAMUM INDICUM」ですが、Sesamo, Jijiri, Jonjoli, Haholi, Jijiri, Jonjole などとも呼ばれています。アメリカ大陸にはスペイン人がもたらし、現在ではユカタン料理にも使われています。ゴマは栄養が豊富で、精神的・知的な活動をする人や、高い生産性を維持したい人のためにも役立ちます。また、血中

コレステロールを減らし、心臓病を予防する効果もあります。トウガラシ（ピーマン）は、メキシコと中米の原産で、クリストバル・コロンがヨーロッパに持ち帰りました。彼の協力者であるペドロ・M・デ・アングレリアが手紙にトウガラシのことを記しており、その手紙には、クリストバル・コロンはじめてトウガラシをヨーロッパに持ってきた1493年9月の日付が銘記されています。メキシコ先住民族は、ラテン語の学名が“CAPISCUM ANNUM”であるこの植物をCHILLIと呼んでいました。スペイン人はこの植物をPIMIENTONTOと名づけ、トウガラシは、アメリカ大陸の植物でもっとも早く大西洋を渡りヨーロッパにもたらされた植物の一つとなりました。その後、イタリアに伝わり、

そこからフランスやポルトガルに広がり、これらの国が世界中に広めました。トウガラシには辛みの有無によって2つのグループに分けられます。甘いトウガラシのなかには、赤や黄色、緑色のものがあり、形や大きさも多様です。赤ピーマンやスイートペッパー（dulce italiano）もそのなかに含まれます。赤ピーマンは、ずんぐりしていて肉厚で大きく、やわらかい味が特徴です。ユカタンでは、辛くないトウガラシをChile Dulceと呼んでいます。ユカタンの私の実家では、ユカタンやメキシコの他地域の多くの料理に、実に多くのトウガラシ（ピーマン）を活用していました。私の母は植木鉢で育てていたから、とれたての新鮮なトウガラシを1年中、料理に使うことができました。

チリ——パタゴニアで大規模水力発電

チリ南部のアイセン地方で電力供給のために5つのダムが建設される大規模水力発電が承認され、さまざまな抗議行動が起きている。

ピニェラ内閣は12の地域行政官による環境影響評価委員会(CEA)を作り、推進する企業や反対する人たちから聞き取りをした後、賛成11人、反対1人で建設が承認された。「ダムのいらぬパタゴニア」などの環境保護組織はこれを不満とし、内務省長官が投票前に承認をほのめかす発言をするなど賛成の運動が行われたことを強調した。当局側は投票は適正に行われたと述べている。

計画はベーカー川とパスクワ川の流域に32億ドルの融資によって5つのダムを建設し、2,750メガワットの発電量を供給し、2025年に操業を目指すというもの。

CEAが承認したことに対して抗議行動が起きているが、最も規模が大きいとされるサンティアゴでの抗議行動では、63人が逮捕され、警察の過剰な暴力行使が告発されている。チリ国民の約6割がこの計画に反対している。また、計画は承認されても、今後約2,300kmの長い送電線が設置されると、環境破壊がさらに進み、設置地域の住民による反対運動が高まる可能性もある。送電線施設の環境への影響は調査が行われており、今年12月にその結果が出る。

環境団体は計画中止を裁判所や会計検査院に申し立てており、米州人権委員会などの国際組織にも提訴を準備している。保健省、環境、農業、経済、エネルギーと鉱山省の長官による審議会が今後計画実施の最終判断を下すことになる。(BBC-Mundo2011/05/11より)

ラテンアメリカ——続く食糧価格高騰

米州開発銀行(IDB)によると、2008年の急騰以来食糧価格の値上がりが続いており、ラテンアメリカ・カリブ地域の人々の生活をさらに圧迫している。今年1月から2月にかけて、国際食糧価格は史上最高となった。特に小麦とトウモロコシが値上がりし、前年に比べて50%高い。2008年に比べてもさらに5~6%上がっている。価格上昇の原因は「中期的な需要の拡大と農産物の生産高の減少と短期の供給減」によるもの。2011年はボリビア、グアテマラ、ホンジュラス、ドミニカ共和国で5%以上のインフレになるとの予想。食糧価格の高騰は2010年にはラテンアメリカ地域で5千万人以上に深刻な影響を与えたが、今年はさらに悪化すると予想されている。特に食糧をすべて購入しなければならない都市部の貧困層はすでに収入の70%を食費に充てなければならず、より苦しむことになる。IDBは国連食糧農業機関(FAO)と共に、食糧価格を高く維持しようとする構造的問題があり、食糧価格とインフレ、食糧へのアクセスは密接に関係している、と結論している。(Noticia Aliadas 20-05-2011より)

ラテンアメリカ——太平洋岸にできる新しい自由貿易圏

チリ、コロンビア、ペルー、そしてメキシコの四カ国で自由貿易圏が形成された。これら4カ国の首脳が4月ペルーに会してそれぞれの国の「経済発展と競争力を強化するための地域統合」を推進するための太平洋同盟を立ち上げた。これにより、同盟国間の資本、サービス、人的資源を自由に流通させる。さらに、メキシコを除く残り3カ国で共通の証券取引所(ラテンアメリカ市場統合MILA)も作られた。メキシコは今後参加の予定。MILAの扱いは6000億ドルで、ブラジルに次いでラテンアメリカ第二の証券取引所になる。太平洋同盟のこれら4カ国はいずれも親米政権でもある。このほかにベネズエラが提唱して作られた米州ボリバル同盟(ALBA)も存在する。これまでも同地域では米州自由貿易地域(ALCA)などいくつかの経済共栄圏構想があったがいずれも長続きしていない。太平洋同盟内では、チリの航空会社LANがペルーのリマをハブ空港にしたり、ペルー人資本家がチリ第一のセメント会社を取得するなど、すでにプライベートセクターで動きが出ているが、チリとペルーの間で

は 19 世紀の戦争以来領土問題がくすぶっているなど、この構想が今後どのように進むかは不明な部分もある。(Noticias Aliadas 11/05/2011, The Economist April 9-15 2011 より)

ペルー——大統領選挙、決選投票に

4 月 10 日行われたペルー大統領選挙は過半数を得票した候補がおらず、上位 2 名による決選投票となった。2 名は民族主義者の元軍人オジャンタ・ウマラ (31.69%) とアルベルト・フジモリ元大統領 (現在人権侵害、汚職で 25 年の懲役刑に服している) の長女で国会議員のケイコ・フジモリ (23.55%)。投票の前のアンケートではこの 2 人のいずれにも票を投じない、とした人が有権者の半分以上いた。決選投票は 6 月 4 日に行われる。現在のアンケートではウマラがわずかにリードしている。ケイコ・フジモリは第 1 回の選挙キャンペーンから父の政治を継承することを強くアピールした。アルベルト・フジモリ政権は人権侵害や汚職など、ペルー民主主義に大きな汚点を残し、国民の間に根強い反感がある反面、貧困層への食糧支給プログラム、過疎地での公共事業などを行った点を評価する有権者もいる。ウマラは候補者の中で唯一、これまでとは違った経済を提唱し、近年の経済の好況の恩恵を受けていない層にアピールしているが、軍人時代に司令官として対ゲリラ戦で人権侵害を犯したことを指摘されている。また、ベネズエラのチャベスとも近いことから、財界など経済政策を危惧する声もある。(Washington Office on Latin America, Peruvian Election page Aril 11, 2011, May 23, 2011 より)

チリ——アジェンデ大統領の遺体発掘

1973 年アウグスト・ピノチェット将軍によるクーデターで倒された当時の社会主義政権大統領サルバドル・アジェンデの遺体が 5 月 23 日司法によって発掘された。クーデター当時アジェンデは大統領官邸におり、包囲されてそこで自殺した、というのが公式見解であり、その時に司法解剖も行われている。だが、使用された武器も弾薬も見つかっておらず、家族が遺体を見ることも禁止されたために殺害されたと信じる人も多い。今回の発掘は、遺族の要請を受けて、死因を確認するために行われるもの。(BBC-Mundo2011/05/23 より)

アンデス——リヤマの糞がインカ帝国の基礎となった？

インカ文明で今日最も有名な遺跡はペルーのマチュピチュだが、今年 6 月はそのマチュピチュが「発見」されて 100 周年となる。考古学雑誌 *Antiquity* に、マチュピチュなどの大文明を築くためにリヤマの糞が大きな貢献をした、とうアレックス・チェプトウ・ラスティ (フランスアンデス研究所) による説が発表された。リヤマの糞がトウモロコシ栽培のための重要な肥料として使われ、それが高地での収穫を可能にしたので、農業の比重が大きくなり、そしてそれがアンデス地域にインカ文明を花咲かせることにつながった、というものである。マルカコチャ湖の湖底の泥を調査して発見された花粉などから、標高 3,350 メートルの高地でトウモロコシが栽培されていたことがわかった。約 2700 年前に起こったこのことがトウモロコシの大量生産を可能にし、それから 100 年の内にアンデスでのインカの政治・経済を大きく変えたという。それまでは食糧はキノアに大きく頼っていたが、でんぷん質を多く含む高カロリーのトウモロコシに変わったことで、より多くの人口を養うことができ、それが帝国の基礎を築いたというもの。

トウモロコシ自体はメキシコから 5000 年ほど前に伝わっていたが、肥料 (リヤマの糞) の導入と高温期が続いたことで初めて高地での大規模栽培が可能になった。リヤマは集団で排便する習慣があり、糞を集めるのが容易だった。(guardian.co.uk, 22 May 2011 より)

今回のペルー訪問は、1986年以來、25年ぶりでした。そういえば、この年はチェルノブイリ事故があった年、1986年のペルーは内戦の真ただ中で、リマにいた時期も太平洋岸に曇りが続く秋から冬の5・6月で、陰鬱なところという印象でした。ところが今回の2月末のリマは、とても明るい印象（天気も人も町も）で驚かされました。モノも豊富で、料理もおいしく、物価は高い。今の方が、ペルー本来の姿なんだと、今さらながら内戦の影響の大きさを実感しました。また、帰国直前には、その内、戦時の貴重な資料（写真集）を手に入れました。それは、ペルー版真相究明委員会の写真報告集でした。（古谷）

次回の『そんりさ』発送作業は 月 日（土）の予定です。
参加いただける方は連絡ください。

大変な作業も、みんなでやれば楽しくあつという間です。
レコム・メーリングリストのご案内：会員・購読者は無料で参加できます。
登録したい方は E-mail : recom@jca.apc.org までアドレスを連絡下さい。

ホームページのご案内 レコムのホームページがどんどんリニューアル！
<http://www.jca.apc.org/recom/>

- | | |
|-------------------------|-----------------------|
| Vol.130 中米に広がるナルコ | Vol.126 エクアドル・フェアトレード |
| Vol.129 コロンビア政治状況の変化と行方 | Vol.125 ボリビア気候変動世界会議 |
| Vol.128 ペルー・バグア事件とその後 | Vol.124 ハイチ大地震特集 |
| Vol.127 コロンビア先住民族少年マウロ | Vol.123 「やより賞」記念ツアー報告 |

レコムに入会（もしくは購読）すると、メーリングリストにも無料で参加できます。
入会したら、自己紹介メールを添えて recom@jca.apc.org までご一報を。登録します。
レコムの活動は会員のみなさんによって支えられています。
☆郵便振替口座：00110-7-567396 日本ラテンアメリカ協力ネットワーク
☆会員 年 8000 円（学生 5000 円）…会の運営、総会での投票、『そんりさ』、資料閲覧・貸出
☆賛助会員 年 10000 円（一口）…資料閲覧・貸し出し、『そんりさ』購読、総会への参加
☆『そんりさ』購読者 年 4000 円…『そんりさ』の購読、メーリングリスト参加可

レコム連絡先
〒 616-0004
京都市西京区嵐山中尾下町 20-15 太田方
TEL&FAX 075-862-2556（留守電）
お問い合わせは、E-MAIL・FAX・手紙もしくは
は留守番電話にメッセージをお願いします。

<レコム口座>
35万8869円
<グアテマラ基金>
20万1101円
(2011年6月現在)